

ベルクソンにおける科学と形而上学との相互援助

—『思考と動くもの』序論第2部の科学論—

野瀬 彰子

序

ベルクソンは、われわれが知性によって日常的に認識している事実とは「実践の諸々の利害関心と社会生活の諸々の要請へ実在しているものが適応させられたもの」(MM 203)にすぎず、利害関心に左右されていない「無媒介の直観」(MM 203)においてこそ実在しているものが捉えられていると述べている。そうすると、科学も、知性による認識に属する以上、実在しているものを捉えていないかのようと思われる。しかし、もう一方で、ベルクソンが当時の科学の知見を積極的に取り入れていたことも広く知られている。科学について主題的に論じた『思考と動くもの』序論第2部において、「われわれは、科学の支配に従い、科学を進歩させることもできた或る種の哲学を求めてきた」(PM 70)と述べ、自らの立場を「科学主義」(PM 71)と呼んでさえもいる。ベルクソンはいかにして直観に基づく形而上学とともに科学をも肯定しているのか。科学と形而上学とを「対象」(PM 44)において区別しているからだろうか。確かに、彼は、形而上学が精神を対象とするのに対して、科学は物質を対象とすると述べる(cf. PM 44)。科学は、精神を自らの仕方で扱おうとすると実在しているものを捉えられないが、物質に関しては実在しているものを捉えることができるのである。しかし、ベルクソンは、科学と形而上学が互いに援助し合うとも述べている(cf. PM 44)。科学と形而上学が異なる対象をもつとしたら、両者は物質と精神について別々に論じるかのように思われる。それにもかかわらず、科学と形而上学とが何故相互に援助し合うのか。

本稿では、ベルクソンにおいて科学と形而上学とがいかにして相互に援助し合っているのかという問いに答えを出すことを目的として、以下のような順序で議論を進める。まず、第1節では、ベルクソンが、知性と直観とを区別し実在しているものは直観されているものだとして述べていながら、それでも知性的認識や科学が実在しているものを捉えているとも言うのは何故かを明らかにする。第2節では、科学と哲学をいかにして区別しているのかを、『物質と記憶』から『創造的進

化』までの変化に注目して明らかにする。そして、第3節では、本稿第1節および第2節の議論を踏まえて、先行研究を批判的に検討しながら、ベルクソンにおいて科学と形而上学とがいかにして相互に援助し合っているのかを解明する。

1. 科学による実在しているものの把握

1. 1 直観と知性との区別

序で述べたように、ベルクソンによれば、われわれの日常的に認識している事実とは実践の諸々の利害関心と社会生活の諸々の要請へ実在しているものが適応させられたものにすぎず、利害関心に左右されていない無媒介の直観においてこそ実在しているものが捉えられている。ベルクソン哲学は発展しながらこのことを示してきた。『試論』においてベルクソンは、外的事物のように空間的なもののみによってはわれわれの内面的経験を説明できず、持続しているものたる自我と持続していない外的事物とが根本的に区別されることを示す。『物質と記憶』では、われわれの精神だけでなく、物質的対象についてのわれわれの認識の根底にも、持続しているものについての直観があるということを示している¹。そして、1903年の「形而上学序説」で、「絶対的なもの」(cf. PM 177-9)たる持続しているものの認識が「直観(intuition)」(cf. PM 181-2)と呼ばれ、「相対的なもの」(cf. PM 178-9)である持続していないものの認識が「分析(analyse)」(cf. PM 179, 181-2)と呼ばれ、明確に区別されるようになる。知性²あるいは分析が相対的なものの認識と呼ばれるのは、知性によって認識されるものが、空間的なものであり、われわれが対象をいかなる「視点」(cf. PM 178-80)から認識しているかまたはいかなる「象徴」(cf. PM 178-80)を用いて認識しているかによって、変容してしまうからである。それらはわれわれが自らの見方に応じて人為的に作り出しているものである。これに対して、直観が絶対的なものの認識と呼ばれるのは、視点や象徴に依拠しておらず、われわれの見方によって変容することはないからである。

直観と知性との区別から考えると、ベルクソン哲学において、実在しているものは直観によって捉えられる他なく、知性によっては実在しているものを捉えられないかのように思われる。ル・ロワはこのようにベルクソンの科学論を解釈する。ル・ロワは、科学も、知性によって成り立つ常識の延長あるいは洗練にすぎず、実在しているものそのものの純粋な観想ではなく、行為のために、空間を占めていない現象をも空間中に併置させていると述べる (cf. Le Roy 1912, 11, 14-6, 18-9)。そして、実在しているものに接触するためには、直接的直観の努力を遂行

せねばならないと述べる (cf. Le Roy 1912, 11)。

ただし、ベルクソンの科学論のル・ロワによる解釈は、ベルクソンが自ら科学について論じるのに先立つ (cf. 杉山 2006, 179-81)。確かに、ル・ロワは、『試論』と『物質と記憶』における持続しているものと持続していないものとの区別や直観についての理論に基づき、科学について論じようとしている。そして、科学が、規約に則って人為的に作り出されたものを扱うにすぎず、実在しているものを捉えることはできないと考える「規約主義」(杉山 2006, 178) を採り、ベルクソンもこの立場だと考える。だが、それはベルクソンが後に『思考と動くもの』で自ら科学論を展開する際に示した内容とは異なる。ベルクソンは、科学が実在しているものを捉えていると述べる (cf. PM 36-7)。それでは、ベルクソンは、一方で直観によって実在しているものが捉えられると述べつつも、他方でいかにして知性や科学も実在しているものを捉えていると述べるのか。

1. 2 弛緩の直観

杉山は、ル・ロワの解釈を批判しつつ、ベルクソンにおいて知性による認識がいかにして実在しているものを捉えるのかを探究している。知性による認識が実在しているものを捉えているのは、それが実在しているものの直観を起源としているからだろうか。確かに、『試論』と『物質と記憶』によれば、知性によって認識される持続していないものでも、その起源および根底には直観されている持続しているものがある³。しかし、たとえ知性の認識対象が直観されているものを分析することで作り出されるとしても、知性の認識対象と直観されているものとは別のものである。知性の認識対象は、直観されているものそのもの一部ではなく、人為的で相対的なものである。直観されているものが起源にあるからといって、知性の認識対象が実在しているというわけではない。そうではなく、知性的認識がそのまま肯定されねばならないのである (cf. 杉山 2006, 193)。

知性、そしてそれに基づく科学のベルクソンによる肯定は、杉山によれば、『創造的進化』における弛緩についての理論によって説明される。「弛緩」(EC 202, 203, 213, 239, 246, 257) とは、われわれの精神の持続していくはたらきたる「緊張」(EC 224, 237, 246) と反対方向のはたらきとして、『創造的進化』で初めて言及される概念である。『創造的進化』第3章で、ベルクソンは、われわれの精神の緊張が弛緩していくことで、われわれの知性も、知性によって認識される物質的对象も、そして物質的对象の配置される空間も発生するというを示す。弛緩についての理論によって、知性的認識および科学が実在しているものを捉えていることが

説明されるように思われるのは、弛緩が直観されているものだからである。例えば、空間に図形を描くだけで、その図形のもつことになる諸々の属性は、自動的に産出される(cf. 杉山 2006, 216)。空間的秩序は、持続していくはたらきたる「意志や生命の運動」(cf. 杉山 2006, 208)が不在となり、精神の緊張が弛緩していくと、「そこから外れて無秩序に向かう可能性がない」(杉山 2006, 207)のような仕方、自動的に生じてくるのである。個々の物質的対象やそれらの配置される空間は、経験においてわれわれが視点や象徴を媒介として作り出すものである。これに対して、自動的に展開される「関係としての空間」(杉山 2006, 217)は、「経験的な確証なしで推論だけで確証される」(杉山 2006, 216)。弛緩は「直観的所与性」(杉山 2006, 217)をもつ。ベルクソンが「科学が或る系を孤立させ閉じる操作は全く人為的な操作というわけではない」(EC 10)と述べるのは、知性の認識対象は人間知性によって作り出された相対的なものだが、それらの対象を生じさせる弛緩のはたらきは直観されているものであり、人為的に作り出されたものではなく、絶対的なものだからである。そして、科学が前提とする空間的秩序が人為的なものではないのだから、科学は実在しているものを捉えていることになる。

しかしながら、弛緩についての理論では、われわれが経験において認識しているさまざまな物質的対象についての科学が、実在しているものを捉えているということが説明されていない。弛緩の直観の存在によって説明されたのは、われわれがそれらを認識し思考するところの空間的秩序が人為的なものではないということである。確かに、弛緩の直観の存在が示されたことによって、空間的秩序そのものを扱う学問たる幾何学が人為的でないことが説明されたと言える。しかし、空間的秩序が人為的なものではないとしても、経験において認識されているさまざまな物質的対象をその秩序に則って扱うことが恣意的でないということには必ずしもならない。ベルクソンは、科学が哲学と「経験において交流している」(PM 44)と述べている。哲学と経験において交流しているのは、空間的秩序の絶対性のみによって説明される、幾何学のような経験に関わらない科学ではない。われわれが経験において認識しているさまざまな物質的対象についての科学、すなわち「実証科学 (science positive)」(PM 34, 44, 45, 58, 70, 71)である。実証科学が、経験において実在しているものを捉えているということを説明せねばならない。

1. 3 持続の程度の差違についての理論と分析

実証科学が経験において実在しているものを捉えているということは、『物質と記憶』における持続の程度の差違についての理論を改めて捉え直すことで説明可

能である。『物質と記憶』において、物質的対象の根底にも持続しているものがあるということが示された。だが、確かに、直観されているものと知性によって認識されているものとはあくまで区別され、持続しているものの直観が根底にあるからといって知性的認識が実在しているものを捉えているということにはならない。それでも、物質的対象の根底にある持続しているものは、われわれの精神の根底にある持続しているものに比べはるかに微小なものである (cf. MM 230)。例えば、われわれが或る瞬間にもつ赤色光の感覚の内には、無数の振動が含まれている (cf. MM 230)。それらの振動はわれわれが意識し得るものよりもはるかに微小なものであり、われわれがその感覚のうちに含まれる諸々の振動を仮に数え上げようとしたら何万年もの時間がかかる (cf. MM 231)。われわれの精神の根底にある持続しているものと物質的対象の根底にある持続しているものとのあいだには程度の差違があるが、その差違は著しいものなのである (cf. Worms 1997, 269)。それゆえ、われわれの意識に現れている感覚的質などをいくら細かく分析しても、その内に凝縮されている諸々の振動をわれわれが具体的に認識することはあり得ない。むしろ、いっそう細分化したほうが、微小な持続しているものに近づくことになる⁴。われわれが経験において認識している物質的対象が、分析され、空間的秩序に則って扱われるのに適しているということは、以上のように説明される。

2. 科学と哲学との区別

2. 1 科学と哲学との対象における区別とは

ところで、科学と哲学は対象において区別されるとベルクソンは述べるのであった。われわれの精神の根底にある持続しているものと物質的対象の根底にある持続しているものとのあいだに著しい程度の差違があるのだとしたら、科学と哲学の対象における区別とは、程度の高い持続しているものを対象とするか、それとも程度の極めて低い持続しているものを対象とするかによる区別なのだろうか。しかし、仮に、とりわけ物質的対象の根底にある持続しているものを分析し空間的秩序に基づいて扱うものと科学を規定すると、われわれの精神や生けるものを扱う心理学や生物学が科学ではないことになる。ベルクソンは心理学も生物学も科学の一種だと見なす。さらに、『物質と記憶』における持続の程度の差違についての理論によれば、われわれの精神の根底にある持続しているものと物質的対象の根底にある持続しているものとのあいだには程度の差違があるが、それでもそれらの持続しているものはそれぞれ独立している。科学と哲学が程度の大きく異な

る二種の持続しているものを対象とすることで区別されると解釈すると、科学と哲学とがいかにして経験において交流しているのか分からなくなってしまう。科学と哲学との対象における区別は、以上とは別の仕方規定されねばならない。

2. 2 緊張と弛緩の二元論と経験という出発点

その際に注意せねばならないのは、『物質と記憶』と『創造的進化』とのあいだのベルクソン哲学の視点の転換である。『物質と記憶』の持続の程度についての理論は、程度の差違をもつさまざまな持続しているものが実在しているという理論である。それは、われわれがいかなるものを認識しているかということやわれわれがいかに物事を認識しているかということではなく、実在しているものがいかなるものかを問題としているいわば存在論的な視点から考えられた理論である。科学と哲学およびそれらの関係について明らかにするには、むしろわれわれが経験からいかにしてさまざまな認識対象に至るのかといういわば認識論的な視点を採る必要がある。実際、われわれが最初に得るのは、その内にさまざまな持続しているものが入り混じっている経験である。『創造的進化』において、ベルクソンは『物質と記憶』の持続の程度の差違についての理論を完全に捨て去るわけではない。それでも、存在論から認識論へと視点を転換させることで、科学と哲学の経験における交流を理解することが可能になり、それと同時に科学と哲学の対象における区別とはいかなるものかを見て取ることが可能になる。

ベルクソンは、経験という同じものから出発し、精神の緊張と弛緩によって、われわれの精神の最も根底にある純粹持続と知性によって認識される相互外在的なものといずれも生じてくることを示している。まず、経験から出発し、精神の緊張を強めていくことで、われわれの精神の最も根底にある持続しているもの、すなわち「純粹な持続 (la pure durée)」(EC 201) に至ることができると述べる。精神の緊張を強めるとは、われわれが持続しているものを分析することで作り出す「知性的なもの」(EC 201) から遠ざかり、できるだけ分析することなく持続しているものを見て取ろうとすることである。ただし、このように精神の緊張を強め純粹な持続に立ち戻ろうとすることは、努力の要ることである。それは、「形而上学序説」でも述べられているように、われわれは通常持続しているものを分析して行為に有用な認識対象を作り出すことを「習慣」(PM 73, 204-5) としており、精神の緊張を強めていくことはこの習慣とは「反対方向」(cf. PM 75, 213-4) に向かうことだからである。今度は反対に、当の緊張を弛緩させると、「非常に微妙でほとんど消えかかっているがゼロではないような或る極めて短い持続

しているもの」(EC 202)に至ると述べる。これは、『物質と記憶』における物質的対象の根底にある微小な持続しているものと同じものだと考えられる。ただし、既に述べたように、われわれが極めて微小な持続しているものを一つ一つ認識することはない。分析によって「要素的」(EC 202)で「相互外在的な」(cf. EC 202)ものに置き換えて認識している。

精神の緊張と弛緩によって経験からわれわれに至るものを、哲学と科学それぞれの対象だと考えると、科学と哲学の対象における区別と、経験における両者の交流とを両立した仕方で理解できる。しかも、経験を分析して作り出される相互外在的なものと科学の対象を規定するならば、物質的対象に限られない。心理的なものや生けるものを扱う心理学や生物学が、物質を対象とする科学の一種だということには違和感が残るかもしれない。しかし、科学としての心理学と生物学が扱うのは心理的なものや生けるものの物質的な側面だと考えれば、理解可能である。確かに、ベルクソンは『創造的進化』までで、われわれの精神の根底に持続しているものがあり、生けるものも持続しているものの一種であることを示した。しかし、われわれの精神も生けるものも、物質的対象と同じ性格をいくらかもつ。われわれの精神には、互いに区別され、他のものと類似しているさまざまな心理的事象がある。生けるものも、物質的対象のようにわれわれが意のままに分析することはできないが、それでも個体のさまざまな部分を区別したり、生物種や群れ、個体といったさまざまな水準に分析して捉えたりすることができる。心理学と生物学は、持続している側面ではなく、こうした分析され物質的対象と同じ性格をもつものとしての側面から心理的なものや生けるものを扱うのである。

そして、科学が経験の分析されるものである側面を対象としており、哲学が経験の直観されているものである側面を対象としているとすると、科学と哲学とのあいだに、対象における区別だけでなく、「方法における区別」(cf. PM 42, 44)があるとベルクソンが述べていることも理解できるようになる。科学は主に分析に依拠するものであり、哲学のほうは主に直観に依拠するものなのである。さらに、ベルクソンが明示的に言及してはいないが、科学と哲学とのあいだには目的における区別もある。われわれは通常知性によって分析されたものを認識しており、それは持続していないものを認識するほうが行為を反復するのに有用だからである。科学は、知性に依拠しわれわれの日常的認識の延長上にあつて、反復的行為を目的としている。行為をいっそう有効なものにするために、日常的に認識されているものをさらに分析することさえある。これに対して、哲学は、実在しているものの認識たる直観に依拠し、実在しているものを明らかにすることを目的と

する。かくして、科学と哲学は次のように区別され規定される。科学は知性によって分析されたものについて行為のために思考することである。これに対して、哲学は実在しているものたる直観されているものについて思考することである。

3. 科学と形而上学の相互援助

3. 1 科学と哲学の二元論

それでは、科学と形而上学は、いかにして相互に援助し合っているのか。科学と形而上学との相互援助についてもいくつかの先行研究で論じられている。

例えば、リキエは、哲学史を概観しながら、従来の形而上学は「科学を誤らせた悪しき形而上学」(PM 71)であるとする。誤った形而上学とは、経験に基づかず、経験の根底にある持続しているものの直観を無視して、「不動で不変なものから出発する」(PM 73) せいで、実在しているものを捉えることができない形而上学である (cf. Riquier 2009, 205-6)。これに対して、ベルクソンは、従来のように経験から切り離されているのではなく、経験あるいは科学の成果に基づく形而上学を打ち立てる。経験に基づいているからこそ、ベルクソンは自らの形而上学を「実証形而上学 (métaphysique positive)」(cf. M 464) と呼ぶ。リキエによれば、ベルクソンは、このように形而上学を経験に基づくものにするので、科学と形而上学を、補完し合い諸々の学問を階層化することができる二つの極としている (cf. PM 86)。経験に基づく形而上学がなければ、科学は、持続していない物体を前提とする誤った形而上学を基礎にする他なく、それ自体も誤りに陥ってしまう (cf. Riquier 2009, 257)。経験に基づく形而上学は、科学と経験を共有し「新しい同盟」(Riquier 2009, 202, 205, 247) を科学と結ぶ。そうすると、科学も、経験に入り込んでいる直観を保持し、直観を介して実在しているものを捉えていることになる。もう一方で、形而上学は、科学の知見などの経験的事実に基づくことで、「精確さ」あるいは「経験的所与の扱いにおける厳密さ」(Riquier 2009, 236) を得ている。それは、直観が、物質的対象の根底にある持続しているものの観念や生命の観念といった、直観されているものを「示唆」(Riquier 2009, 247-9) する認識対象へと結びつけられることを意味している。

リキエの言うように、ベルクソンが、従来の形而上学を批判し、経験に基づき、科学と相互補完的な関係を結ぶことのできる新たな形而上学を提示しようとしているというのは間違いない。しかも、科学と哲学の関係は、ベルクソンのよく用いる二元論の形式に当てはまる。例えば、ベルクソンが『試論』において空間と

持続の二元論を提示する際、空間と持続とを本質的に区別するが、われわれが経験において出会うのは、持続の入り込んでいない純粋な空間および空間の入り込んでいない純粋な持続ではなく、空間と持続が「内方浸透」(cf. DI 81, 83)した中間的なものである。これと同じように、科学と哲学も本質的に区別される二つの極であるが、事実上成り立っているのは両者が混合したものである。

科学と哲学が互いに介入し合うことで成立しているということは、科学と哲学の方法における区別から考えると、いっそう理解しやすい。哲学は、実在しているものたる直観されているものについて思考することと規定された。それは純粋に直観することではない。「諸々の概念は形而上学に不可欠なものである」(PM 188)。ベルクソンは、直観を何か特別な努力をした時にしか得られないものとして提示しているのではない。直観は、知性によって認識される行為に有用なものによって隠されていて「曖昧なもの」(cf. PM 193-4)である。それでも、われわれはさまざまな持続しているものについての直観を常にもっており、その直観が根底にあるからこそ経験や知性による認識も成り立っている。哲学は、通常隠されているが直観されているものを概念によって表現し、われわれがそれに注意を向けるのを可能にすることなのである。それゆえ、哲学は直観だけではなく分析が介入することによって初めて成立するものである。これに対して、科学は、知性によって分析されたものについて行為のために思考することと規定された。しかし、既に述べたように、知性によって分析されるものには必ず持続しているものの直観が先立っている。哲学の方法たる直観なしには科学はあり得ない。さらに、科学が、生氣のないものを主に扱い、空間的秩序に則って分析されたものを関係づけ理解するのは、知性だけでなく、程度の低い持続しているものについての直観やわれわれの精神の弛緩についての直観に基づいているからである。いっそう程度の低い持続しているものを認識する際には分析を進めたり、異なる質を帯びているものを混同せずに認識したりする。他方で、知性によって分析されて作り出されたものには、空間的秩序を適用する。これらはいずれも直観に基づいている。このように、哲学には科学の方法たる分析が、科学には哲学の方法たる直観が入り込むことで両者は成立しているのである。

3. 2 科学と形而上学の相互援助による発展

だが、科学と哲学は、相互に介入し合うことで成立しているだけでなく、相互に援助し合うことで「一つの集合的かつ漸進的な努力」(PM 33)によって共に発展していく。リキエは科学と形而上学との相互援助による発展について詳しく説

明していない。これに対して、三宅は、科学と形而上学との「相補的關係」(三宅 2012, 14) を三段階に分けて説明しており、そこには科学と哲学との相互援助による発展が示されている。三つの段階とは次のようなものである。第一に、ベルクソンの形而上学は、科学が生氣のないものだけでなく生けるものにまで自らの形式を適用し極度な図式化を行うことを批判する(cf. 三宅 2012, 19)。だが他方で、第二に、この形而上学は、科学の経験的事実によって検証され、蓋然性を高められる。「直観を得るためには非常な努力が必要なにもかかわらず、直観は長続きせず、逃れやすい」(三宅 2012, 19-20) ので、直観に基づく形而上学は暫定的なものにしかならない。それでも、科学の経験的事実により検証をすることで、形而上学において想定されたことの蓋然性を高めていけるのである。そして、第三に、ベルクソンの形而上学が科学に積極的な影響を与えることもある。微分の発見のように偉大な発見や発明が生み出される時、「科学者のなかにも、科学的な創意や発明を可能にするような直観が働」(三宅 2012, 20) いており、形而上学が入り込んでいるのである。ベルクソンの形而上学は、科学の誤りを修正するとともに、偉大な発見や発明が生み出されて科学が発展するのを助ける。もう一方で、科学は形而上学の蓋然性を高めるという仕方で、形而上学の発展を助けるのである。

しかしながら、三宅の解釈では科学と形而上学との関係が限定的である。というのも、科学の援助によって形而上学の蓋然性が高められるといっても、それは形而上学の内容には関わらないからである。形而上学は自らの内容を独力で構築していくことになる。他方で、科学は形而上学の方法たる直観によって偉大な発見や発明を生み出すことができるといっても、そこで科学の援助となっているのは、形而上学者によって構築された学問としての形而上学ではなく、科学者の有する直観だということになる。そうだとすると、科学が形而上学の援助によって発展するといっても、形而上学者は要らないことになってしまう。

そうではなく、『思考と動くもの』序論第2部でベルクソンは、科学と形而上学が、それぞれの方法たる分析と直観においてだけでなく、学問として相互に援助し合いながら、その内容をもそれぞれ発展させていくということを示している。科学と形而上学とが相互に援助し合うことで一つの集成的かつ漸進的な努力によって共に発展していくという際の、「集成的」(PM 33) とは複数の人物の協働が必要だということの意味しており、「漸進的」(PM 33) とは一定の時間をかけなければならないということの意味している。科学にとって、多数の人物によって観察や実験の結果が集められねばならないということや、経験的事実を集めるのに時間がかかるということは、当然である。これに対して、哲学は、一人の哲学

者が無媒介に直観しているものだけに仮に基づくのだとしたら、必ずしも集合的であるわけではない。ただし、一人の哲学者が無媒介に直観しているものとは、当の哲学者の持続している自我とそのさまざまな側面たる意識的事象である。それらは、『試論』から繰り返し例に出されているメロディーのように、われわれの経験に現れ得る持続しているものである。しかし、ベルクソンは、われわれが無媒介に直観しておらず、われわれの経験には決して現れ得ない持続しているものもあることを示している。例えば、物質的対象の根底にある微小な持続しているものや、『創造的進化』で提示される持続しているものとしての生命である。物質的対象の根底にある持続しているものがわれわれの経験に現れ得ないのは、われわれの経験に現れ得るものに比して著しく程度が低く微小だからである。生命がわれわれの経験に現れ得ないのは、われわれの精神の最も根底にあり持続している「根底的自我」(DI 93, 96) よりもいっそう根源にあるものだからである。われわれの経験はあくまでわれわれの各々が生誕してから現在までしか含まないのだから、それよりも長く持続している生命はわれわれの経験には含まれていない。こうしたわれわれの経験に現れ得ない持続しているものを思考する哲学こそ、形而上学と呼ばれるべきである。『思考と動くもの』序論第2部では、哲学と形而上学という言葉はほとんど同じものとして扱われている。しかし、本稿では、哲学のうち、われわれの経験に現れ得ないものを思考することを、とりわけ形而上学と呼ぼう。形而上学は、哲学とは異なる仕方実在しているものについて思考することになる。というのも、形而上学の扱う実在しているものは、われわれの個人的経験のみから思考することができないからである。もちろんわれわれの個人的な経験に現れるものも手がかりになる。だが、それだけでなく、複数の人物の経験に現れているものを手がかりとし、推論することになる。形而上学は、形而上学者自らの経験だけでなく複数の人物の経験を参照するがゆえに集合的なものである (cf. PM 72)。科学者による観察や実験の結果は、形而上学が参照する他者の経験や他なるものについての経験の一種である。形而上学が漸進的なのは、科学が新たな経験的事実を発見するのに応じて発展していき、経験に現れないものを思考可能にしていくからである。

われわれの経験に現れ得ない持続しているものが、科学者によって少しずつ発見されたさまざまな経験的事実を参照し科学の援助を得ることによって、形而上学によって思考可能になる過程を、ベルクソンは、『試論』から『物質と記憶』までの自らの形而上学の発展、さらには『物質と記憶』から『創造的進化』までの自らの形而上学の発展に見出している。とりわけ、『試論』から『物質と記憶』ま

での発展は明示的に説明されている (cf. PM 78-83)。さらに、『試論』から『物質と記憶』までのベルクソンの形而上学の発展が翻って実証科学の発展をも促すということも同時に示されている。『試論』においてベルクソンは、われわれの自我が根底において持続しているものであることを示し、持続している根底的自我を顕現させる行為のことを「自由行為」(DI 124-5)と呼んでいる。『物質と記憶』においては、当時の心理学や生理学、物理学の成果を導入し、われわれの精神の根底だけでなくわれわれの認識している物質的対象の根底にも持続しているものがあるということを明らかにする。ベルクソンの形而上学が『試論』から『物質と記憶』までのあいだで発展したのは、その間に当時の科学者たちによって得られた経験的事実を導入したからである。科学者たちが経験的事実を得るのを待たねばならなかったからこそ、ベルクソンの形而上学が発展するには時間がかかった (cf. PM 80)。そして、物質的対象の根底に持続しているものがあるという『物質と記憶』の理論は、持続していないものから出発し科学を誤らせてきた悪しき形而上学を退け、科学を修正することを要請する。確かに、ベルクソンは、自らの理論が、「現れた当初は逆説的なものだと一般に判断されたが、そのいくつかは今や当たり前のものとなっている」(PM 73)と述べ、量子力学の成立という科学の発展 (cf. PM 77-8) を先取りしていたと言うにとどめる。それでも、ベルクソンは、科学と形而上学が「一つの集成的かつ漸進的努力から成り立つ」(PM 33)と述べ、形而上学が科学を援助することも想定しているのだから、形而上学を発展させその援助によって科学をも発展させることが可能だと考えているだろう。

さらに、『物質と記憶』から『創造的進化』までの形而上学の発展とそれに伴う科学の発展というのもベルクソンが想定していたと解釈できる。「われわれは、『創造的進化』に先立つわれわれの著作『物質と記憶』から、進化についての或る真らしい学説を引き出すことは決してできなかった」(PM 97)と彼は述べる。『創造的進化』第1章において、ベルクソンは、われわれの精神の根底に持続しているものがあることから類推する形で、「生命の流れ」(EC 26)という持続しているものが生物進化の根底にあるということを示す。この際、確かにわれわれの精神の根底にある持続しているものから出発するが、それでも生物進化の根底にも持続しているものがあるということを示す際には、当時の古生物学や比較解剖学の成果を参照している (cf. EC 23-4)。『創造的進化』におけるいわば生命についての形而上学は、当時の生物学者たちによる発見や観察の結果がなければあり得なかった。そして、『創造的進化』第1章では、生命についての形而上学が提示された後に、ダーウィニズムやラマルキズムなど当時の進化についての学

説が批判される。これは、生命についての自らの形而上学が生物学あるいは進化論に修正を迫るものだということを示しているのではないだろうか⁵。そうだとすると、ベルクソンの形而上学が、当時の科学の成果を導入しながら漸進的に発展していき、それに伴って科学にも変革を要請していくということは、『試論』から『創造的進化』まで一貫して示されていることになる。

このように、ベルクソンは、科学の知見を導入することで形而上学が発展し、さらに、発展した形而上学が今度は科学の発展を促すことを示す。形而上学は、科学の明らかにした経験的事実を導入することで、単に蓋然性を高めるだけでなく、内容をも発展させている。反対に、科学も、形而上学が発展し物質的対象の根底にある持続しているものや生命を示すことで、新しい内容のものに発展する、あるいは少なくとも発展を容易にさせられたと考えられる。そして、形而上学を発展させるのは、形而上学者が行う分析だけではなく、科学者たちによって明らかにされた経験的事実である。逆に、科学を発展させるのは、科学者が得る直観だけでなく、形而上学者が構築した学問としての形而上学なのである。

結び

カントは、それまでの形而上学が、解けない問いを理性によって課されており、そのせいで「果てしない争いの生じる戦場」(KdrV AVIII) と化していると述べる。その後も、現在まで科学が発展していくのに応じるかのように、形而上学の可能性や意義に疑問が投げかけられてきた。時には形而上学が全く無意味なものとされることまである (cf. Carnap [1937] 2000, 278)。科学と形而上学は哲学史上互いに否定し合う関係にあるかのようにしばしば思い込まれてきたのである。これに対して、ベルクソンは、われわれの日常的な認識や科学を成り立たせる知性ではなく、それとは区別される直観という認識機能によってこそ実在しているものを捉えられると述べる。そして、形而上学が、直観に依拠することによって、実在しているものを捉えるだけでなく、解けないと思われていた問題をも解決できるということを示す。だが、それでは逆に、知性に基づく科学のほうが実在しているものを捉えていないのだろうか。そうではない。ベルクソンは、科学が知性によって分析を行っていても実在しているものを捉えているということも示している。そして、科学と哲学との二元論を提示する。この二元論は、科学と哲学が、いずれかが全く偶然的であったり、一方が他方に還元されたりするものではなく、いずれもわれわれにとって必然的だということを含意している。これに加えて、

この二元論によれば、科学と哲学は相互に援助し合う。しかも、分析と直観という各々の方法が介入し合って科学と哲学とが成り立っているだけでなく、科学と形而上学は、学問として専門家達によってそれぞれ漸進的に発展させられ、相互に援助し合いながらさらに発展する。ベルクソンは、科学と形而上学とが、二者択一的なものではなく両立しているものであり、しかもそれらが互いに介入し合って成り立ち、互いに援助し合って発展していくことを示しているのである。

¹ Cf. 野瀬 (2019) .

² 「知性 (intelligence)」という語が明示的に用いられるようになるのは『創造的進化』からであるが、それは『試論』や『物質と記憶』で持続していないものの認識として論じられ、「形而上学序説」で分析と呼ばれているものと同じものである。

³ Cf. 野瀬 (2020) .

⁴ とはいえ、物質的対象の根底にある持続しているものが全て同じ仕方では分析されるべきだというわけではない。例えば、二色の感覚のあいだには異質性がある (cf. MM 227-8)。われわれの意識よりも著しく程度の低い持続しているものを扱う限り、科学が分析を際限なく進めていくことは正当化される。ただし、理論上、あくまで、経験に入り込んでいる持続しているものの直観に基づきつつ、その直観に反しない形で分析を行わねばならない。

⁵ 当時から現代まで生物学がベルクソンの言うような形で発展してきたとは言い難い。それでもなおベルクソンの生命論にいかなる意味があるのかについては別の機会に論じたい。

[文献表]

1. 一次文献

ベルクソンの著作の引用・参照については以下の略号を用いて頁数を示す。カントの引用に関しては慣例の略号を用いて示す。

DI : *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Puf, [1889] 2011.

MM : *Matière et mémoire*, Puf, [1896] 2008.

EC : *L'évolution créatrice*, Puf, [1907] 2009.

PM : *La pensée et le mouvant*, Puf, [1934] 2013.

M : *Mélanges*, Puf, 1972.

KdV : *Kritik der reinen Vernunft*, Meiner, [1787] 1998. (『純粹理性批判』, 熊野純彦訳, 作品社, 2012.)

2. その他の文献

Carnap, Rudolf. [1937] 2000. *Logical Syntax of Language*, Routledge.

Le Roy, Édouard. 1912. *Une philosophie nouvelle*. Henri Bergson, Félix Alcan.

Riquier, Camille. 2009. *Archéologie de Bergson. Temps et métaphysique*, Puf.

Worms, Frédéric. 1997. *Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, Puf.

杉山直樹. 2006. 『ベルクソン 聴診する経験論』, 創文社.

野瀬彰子. 2019. 「ベルクソン『物質と記憶』における直観と方法」, 『論集』, 東京大学哲学研究室編, 第37号, 133-46.

———. 2020. 「ベルクソンにおける持続しているものの実在」, 『論集』, 東京大学哲学研究室編, 第38号, 41-54.

三宅岳史. 2012. 『ベルクソン哲学と科学との対話』, 京都大学出版会.